

母親の就労状況と親の育児行動が 大学生の育児観に及ぼす影響

日下部典子

今日母親にとってストレスであるといわれる子育てであるが、ストレスを軽減するためには父親が育児の大変さを理解し、母親とともに育児や家事を分担することがある。本研究では子育て予備軍である大学生を対象として調査を行い、将来については父親と母親がともに育児をすることを理想としながら、実際の育児行動は母親が中心であることを肯定する者が多いことが明らかとなった。そこで自分の育った家庭での役割分担や母親の就労状況との関連を検討した結果、就学前に母親が就労していた群は、出産後も母親が仕事を継続することが望ましいとの回答が有意に多かった。また、父親が育児をしていた学生の方が育児は母親だけがするとの意識が低く、幼児期の家庭環境が大学生の育児観に影響することが明らかとなった。

〔キーワード：大学生，育児観，育児ストレス〕

問題と目的

育児は母親だけが担うのではなく、父親と母親の共同作業であると言われるようになって久しいが（厚生労働省，1998），依然として育児の主な担い手は母親であり，さらに一人で育児を行うことは母親にとってストレスを感じさせることである（川井・庄司・安藤・武島・山内・永井・堤，2002；日下部，2001a；内閣府，2005）。乳幼児を育てる母親が日常生活の中で，ストレスを感じる要因として，「子どもの問題行動」，「子どもが少食である」などの子ども要因，「自分の時間がないこと」，「社会から隔離されている」などの母親要因に加えて，「夫が育児や家事をしてくれない」，「夫が育児の大変さを理解してくれない」などの父親要因があり（日下部，2002；日下部・坂野，2001a），母親のストレス軽減に夫の家事や育児へのサポート，育児ストレスの理解が有効であることが先行研究から明らかとなっている（小阪・柏木，2007；日下部，2002；日下部・坂野，2001a；牧野，1982）。

父親と母親が育児や家事を分担しあうことが理想であるにもかかわらず，実際に子どもが生まれた後，育児が母親一人の役割分担になっており（内閣府，2005），父親が育児をする

ことに対する無理解、男性が育児休暇を取ることの難しさ、女性が育児をしながら仕事を続けることに対する社会や職場の無理解がある(厚生労働省, 1998)。厚生労働省(1998)の調査によると、30, 40歳代で子どものいる女性の約6割が育児や家事のために離職している。就労形態に関して、子どもが3歳以下では約4割が就労を希望、中学生では9割に達しているが、現状は3歳時点で就労している女性は3割以下、子どもが中学生になっても半数程度であり、希望と現状との間に食い違いがある(厚生労働省, 1998)。出産を機に仕事をやめた理由として、「家事・育児に時間をとりたかったから(53.3%)」が最も多く、仕事と育児の両立が難しいことがわかる。また、周囲の者が離職を希望したり、本人もやめるのが当たり前と思ったなどの理由が合計すると約4割にのぼり、男女ともに依然として育児母親がするものという意識が高いことが明らかである(厚生労働省, 1998)。そこで、本研究では将来親となり子育てを行うであろう大学生を対象に、その育児間を調査することとする。また、幼児期からこれまでを回想し、母親の就労状況および自分の親の育児状況を明らかにし、それらが育児観に影響しているかを検討することとする。

方 法

実施方法 2005年9月から11月にかけて東京都と神奈川県のある大学および短期大学において実施された。授業時間内に調査の趣旨に同意した大学生に質問紙が配布され、回答後に回収された。

調査対象者 男性55名(平均年齢20.87歳, $SD=4.11$)、女性139名(平均年齢19.73歳, $SD=3.63$)の196名(1年生156名、2年生14名、3年生14名、4年生8名)。

質問紙 年齢、性別、家族構成などを尋ねるフェイス・シートと、育児観を尋ねる質問、母親の就労状況、幼児期の父親と母親の育児行動を尋ねる質問とから構成された。母親の就労状況については、乳児期から大学生の現在までを、「乳児期・幼稚園期・小学校期・中学校期・高校期」の5期に分け、「フルタイム・パートタイム・無職」の3つから選択させた。自分の幼児期における父親と母親の育児行動は、父親と母親のそれぞれについて「遊んでくれた・お風呂に入れてくれた・食事をさせてくれた・寝かせてくれた・叱られた・ほめてくれた」等の行動があったかどうかを「1. ほとんどなかった」から「4. よくしてくれた」までの4段階で回答を求めた。育児観については、「母親だけが育児を担っている状況をどう思いますか」という質問と、父親が子育て、育児をどのようにするのが良いかを尋ねる質問に対して選択式で回答を求めた。

結 果

回答の学年差を検討した結果、短期大学と大学、および学年による回答の違いがみられなかったため、以下の解析は学校形態、学年を分けずに行った。

家族形態と母親の就労状況 幼児期、児童期の家族形態は、いずれも核家族が68%と最も多く、続いて「父親方の親と同居していた」の20%であった。母親の就労の有無を尋ねた結果、就労していなかったとの回答が乳幼児期70%、幼稚園時期53%と最も多かったが、小学校・中学校・高校の時期は就労していたとの回答が増加しており、専業主婦であった数は子どもの年齢が上がるにつれて減少し、高校時代も母親が専業主婦であった者は18%であった (Fig. 1)。主な育児の担い手は母親が72%と最も多く、母親の就労の有無による有意な差はなかった。

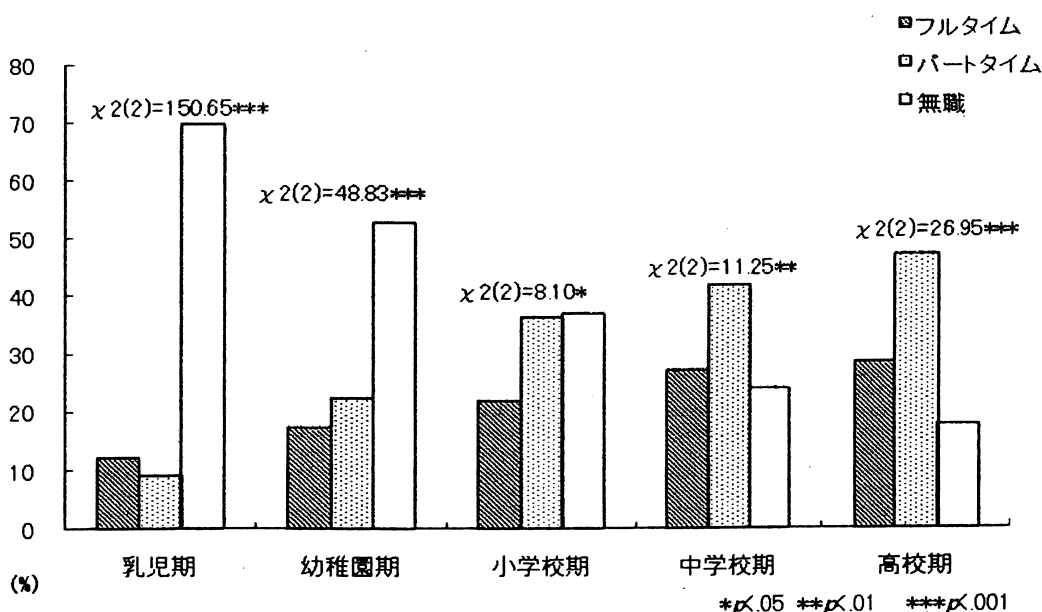


Fig. 1 母親の就労状況 (N=195)

父親と母親の育児行動 幼児期に遊び、入浴、食事、寝かしつけなどの世話や、遊んでくれるなどの育児行動をどのくらい父母が行っていたかを尋ねた結果、父親・母親とも、「私と一緒に食事をしてくれた」、「私とおしゃべりしてくれた」の項目の得点が高かった。父親と母親の得点の差を t 検定によって検討した結果、すべての行動で母親の得点が有意に高かった (Table 1)。

回答者の性別によって得点に違いがあるかを検討した結果、ほとんどの項目で女子の得点が男子の得点よりも高かった。

Table 1 父親と母親の各育児行動得点の平均値(SD)と検定の結果(N=196)

	父親		母親	t 値
私と外で遊んでくれた	2.58(.95)	<	2.74(.98)	-1.96 *
私と平日遊んでくれた	2.06(1.01)	<	2.62(1.08)	-6.89 ***
私をお風呂に入れてくれた	2.75(1.00)	<	3.05(1.01)	-3.13 ***
私と一緒に食事をしてくれた	3.36(.85)	<	3.88(.43)	-8.64 ***
私を叱った	2.52(1.06)	<	3.30(.78)	-10.04 ***
私が寝るとき、一緒にいてくれた	2.35(1.27)	<	3.30(.98)	-11.27 ***
私とおしゃべりしてくれた	3.27(.92)	<	3.72(.62)	-7.05 ***
私をほめてくれた	2.68(.91)	<	3.20(.74)	-7.54 ***

* $p<.05$ *** $p<.001$

育児観について 現在の日本社会で主に母親が育児を一人でしている状況をどう思うかを尋ねた結果、「育児は父親も一緒にするべきだ」と回答した者が74%、「育児は母親がするのが当然だ」が5%、「周囲の人に手伝ってもらう方が良い」が21%であった。親の育児行動得点の高低によって育児観に違いがあるかを検討するため、平均値で得点高群と低群に分けて χ^2 検定を行った結果、回答に有意な差があり($\chi^2(2)=11.70, p<.01$)、「育児は母親がするのが当然だ」の回答は育児行動得点低群が有意に多く、高群は有意に少なかった。また、「育児は父母だけでするのではなく、周囲の人に手うだってもらう方が良い」の回答は、低群が有意に少なく、高群が有意に多かった。

父親の育児や家事における役割分担のあり方を尋ねたところ、「時間があるときに育児と家事を手伝う(53%)」と「育児も家事も半々で行う(41%)」と回答した者が有意に多く、「家事のみ手伝う」や「育児と家事は妻の仕事なので、ほとんど手伝わない」、「育児と家事をすべて引き受ける」を選択した者はいなかった($\chi^2(7)=243.62, p<.001$)。役割分担に関する質問に対する回答は性別および母親の就労形態で有意な差はなかった。

結婚後の女性の就労形態について 結婚後の女性の望ましい就労形態として最も多い回答は、「子どもが小学校に入ってから、仕事につく」で、最も少なかったのは「出産後も子どもを預けて仕事を続ける」であり、 χ^2 検定を行った結果、有意な差があった($\chi^2(6)=41.33, p<.001$) (Fig. 2)。男子は「出産を機に退職」と回答した者が最も多く、女子は「子どもが小

学校に入ってからパートタイムの仕事に就く」であった。就労形態では、男女ともにフルタイムではなくパートタイム就労を選択する者が多かった。出産後の就労形態と自分の母親の就労形態との間に関係があるかを χ^2 検定で検討したところ、就学前に母親が就労していた群（就労群）は非就労群と比べて、子どもを出産後も就労を継続することが望ましいと回答している者が有意に多かった（ $\chi^2(6)=24.85, p<.001$ ）。就学後の母親の就労状況では回答に有意な差はなかった。

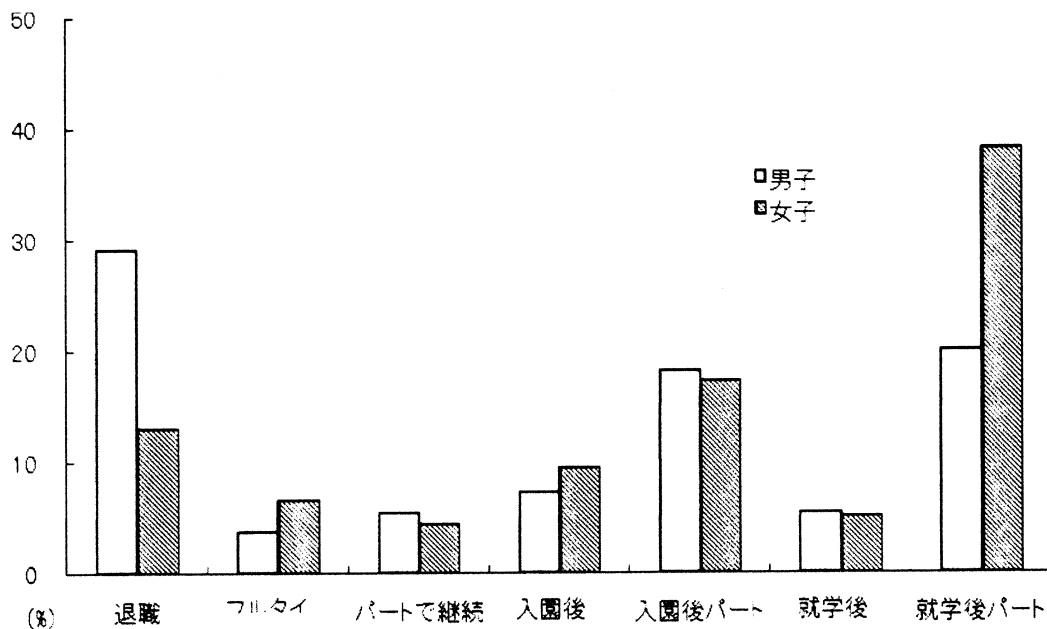


Fig.2 出産後の女性に対する希望就労形態(N=196)

考 察

今回調査した学生の母親のうち、乳幼児期から就労していたものは30%であり、その数は子どもの成長に伴い増加し、高校時代では80%以上が何らかの形で就労していた（Fig.1）。この結果は厚生労働省（1998）の発表と比較したとき、乳幼児期の割合は同じであるが、中高校期では大きくなっており、この10年の間にも就労している母親が増加していることが明らかとなった。

次に、父親と母親の育児行動では、父親、母親いずれも外で遊んだり、食事の世話をしたり、おしゃべりしたりと多くの関わりをしてもらったとの回答が多かった（Table 1）。川井他（2002）の行った既婚者を対象とした調査（平均年齢夫35.4歳、妻33.1歳）で、「両親と

もに遊んでくれた」が夫 43.4%, 妻 50.6%と比べると割合が高くなっていたが、いずれの行動も父親と比べて母親の得点が高くなっており、依然として母親がより多くの世話をしている他実態が明らかとなった。

現在の主に母親が育児をしている現状をどう思うかに対しては「育児は父親も一緒にするべきだ」が74%と有意に多く、「母親がするのが当然だ」は5%であり、大学生は母親だけが育児を担うことには反対であることが明らかとなった。回答者の72%が「母親が主に育児をしていた」と回答していることと併せて考えると、自分たちの受けた「母親が主に育児をしていた」状況は育児意識に伝達していないことが示唆される。しかし、「周囲の人に手伝ってもらう方が良い」を選択した者は21%と少なく、「社会からの孤立」に母親がストレスを感じており、夫が育児に参加していない現状で、周囲のサポートは母親のストレス軽減にとって重要であるにもかかわらず(日下部, 2002; 竹田・岩立, 1999), 大学生にとって育児におけるサポートの重要性が認識されていないことの現れと考えられる。すなわち育児ストレス低減のために、孤立した状況を変えることや周囲のサポートを増やすことが有効であること(日下部, 2002; 2007)を教育する必要性が示唆された。

ところで、育児は父親と母親がともに行うことが良いと回答している学生たちが、育児や家事の役割分担をどのように考えているかをみると、父親の育児や家事行動のあり方について、「時間があるときに育児と家事を手伝う」と回答した者が53%, 「育児も家事も半々で行う」は41%であり、性別による有意差はなかった。「ほとんど手伝わない」を選択した者はおらず、母親だけが育児を分担することは不適切であると感じているにもかかわらず、大学生が将来の育児を考えたときに、母親が主に育児をし、父親は「手伝う」人であると回答した者が過半数に達し、父親と母親が同じように分担して育児をすることを望む学生よりも男女ともに多いことが明らかとなった。また、「家事のみ手伝う」と回答した者はおらず、子育てをしているときに、家事をすることもストレス軽減につながる意識の低いことが示唆された。川井他(2003)は夫・父親役割について、妻側は「妻の相談相手・精神的な支え(67.4%)」、「母親の役割の肩代わりをする(31.7%)」を求めているのに対し、夫側は前者に関しては38.2%, 後者は27.9%と、妻と夫の認識の間に相違があると述べているが、本研究の結果からも、母親が一人で育児をし、育児ストレスのストレスサーである「夫の育児や家事への非協力的態度」(日下部, 2002)が今後も引き続く可能性があると考えられる。望ましい父親の育児・家事行動への回答は、母親の就労の有無および親の養育行動得点では有意な差がないことから、このような意識は育った環境とはあまり関係がないと考えられる。本研究の結果から、母親がストレスを抱えて育児をしている現状を改善していくためには、これまで提案されている育児ストレスの実態とストレス軽減のためのストレス・マネジメント教育(日下部, 2007; Lazarus & Folkman, 1984; 鈴木, 2004; 高畑・富田・饗庭・大谷, 2006)に加えて、育児ストレスを軽減する上での父親の育児への理解や協力の必要性(Forehand & Long,

1996 ; 竹田・岩立, 1999) などを教育することで、実際の育児行動に関する考え方を変化させる可能性があると思われる。また、幼児期に母親が就労していたかどうかは女性の出産後の就労形態意識に影響を及ぼしていた結果からも、今後ますます出産後の女性の就労率が上昇することが予想されるが、育児行動についての意識がそれに伴い変化していないという今回の結果は、母親の育児ストレスが減少しないのではないかとの危惧を抱かせる(数井・無籐・園田, 1996)。育児観の形成には、家庭はもちろんであるが、それだけではなく学校教育、社会などの環境からの影響もあると考えられ、それらの要因についてのより詳細な調査が今後必要である。

引用文献

- Forehand R. & Long N. (1996). *Parenting The Strong-willed Child*. The McGraw Hill
(小羽俊二 (訳) (2003). 困った子が5週間で変わる 日本評論社)
- 数井みゆき・武籐 隆・園田菜摘 (1996). 子どもの発達と母子関係・夫婦関係・幼児を持つ家族について 発達心理学研究, 7, 31-40. (Kazui, M., Muto, T., & Sonoda, N. (1996). The roles of marital quality and parenting stress in mother-preschooler relationship: A family systems perspective. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, 7, 31-40.)
- 川井 尚・庄司順一・安藤朗子・武島春乃・山内浩子・永井桃子・堤 道子 (2002). 父親・男性研究Ⅱ 日本子ども家庭総合研究所紀要, 39, 237-251. (Kawai, H., Shoji, J., Ando, A., Takeshima, H., Yamauchi, H., Nagai, M., & Tutumi, M. (2002). A study on paternal and masculine gender role. *Reports of studies of Japan Child and Family Research Institute*, 39, 237-251.)
- 小坂千秋・柏木恵子 (2007). 育児期女性の就労継続・退職を規定する要因 発達心理学研究, 18, 45-54. (Kosaka, C., & Kashiwagi, K. (2007). Influences on women's decisions to continue work vs. discontinue employment to raise children. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, 18, 45-54.)
- 厚生労働省 (1998). 厚生白書 ギョウセイ
- 日下部典子 (2002). 3歳児の母親の育児ストレス, 博士論文, 未公開.
- 日下部典子 (2007). 園児の母親のストレスーストレッサーとコーピングー 早稲田大学臨床心理学研究, 6, 89-99. (Kusakabe, N. (2007). Stress process of nursery school children's mother: stressor and coping behavior. *Waseda Journal of Clinical Psychology*, 6, 89-99.)
- 日下部典子・坂野雄二 (2001a). 育児ストレス過程におけるストレッサーとストレス反応 早

- 稲田大学臨床心理学研究, 1, 55-66. (Kusakabe, N., & Sakano, Y. (2001). Factorial structure of parenting stress. *Waseda Journal of Clinical Psychology*, 1, 55-66.)
- 日下部典子・坂野雄二 (2001b). 3歳児をもつ母親のストレスサー ストレス科学, 15, 276-283. (Kusakabe, N., & Sakano, Y. (2001). The stressors of mothers rearing 3-year old children. *Japanese Journal of Stress Sciences*, 15, 276-283.)
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984). Stress, appraisal, and coping, New York, Springer
- 牧野カツコ (1982). 乳幼児を持つ母親の生活とく育児不安> 家庭教育研究所紀要, 3, 34-56.
- 内閣府 (2005). 国民生活白書 ギョウセイ
- 内閣府 (2007). 食育白書 時事画報社
- 鈴木伸一 (2004). ストレス研究の発展と臨床応用の可能性 坂野雄二 (監修) 学校, 職場, 地域におけるストレスマネジメント実践マニュアル 北大路書房 pp. 3-10.
- 高畑彩友美・富田圭子・饗庭照美・大谷貴美子 (2006). 母親の食生活に対する意識や生活充実感が幼稚園に通う子どもとのコミュニケーション頻度に与える影響 日本家政学会誌, 57, 287-299. (Takahata, S., Tomita, K., Aiba, T., & Ohtani, K. (2006). Influence of the mother's thought toward dietary life and the feeling of fulfillment of her life on the communication with her child in the kindergarten. *Journal of Home Economics of Japan*, 57, 287-299.)
- 竹田小百合・岩立京子 (1999). ソーシャル・サポートが育児ストレスにおよぼす効果について—特定のサポート源の違いおよびサポートに対する必要度との関連から— 東京学芸大学紀要1部門, 50, 215-222. (Takeda, S. & Iwatate, K. (1999). The effects of social support on reading related stress : about differences from social support provided from specific source and relation to needs for social support. *Bulletin of Tokyo Gakugei University. Seires I, Science of education*, 50, 215-222.)

How does the mother's employment and parent's child caring influence university student's view of child care behaviour?

Noriko Kusakabe

As most mothers feel stress on child caring today, we need to find out the way to reduce their stresses. One of the schemes is father's understanding and sharing of child caring. In this investigation, though university students affirm to bring up children by both parents of an ideal situation, they classify child caring behavior as mothers' job. The two factors that influence students' way of thinking are found out. One is if their fathers cared them in their infant period, and the other is if their mothers had job before school age.

Key words: university students, child caring, stress